戯曲「そして羽音、ひとつ」

作・山岡　徳貴子

登場人物

老女

女（やがて娘と呼ばれる）

男（やがて息子という）

ジロー（何でも屋・介護関係）

新人（ジローに連れてこられた）

場所

裏庭のある家。
人知れずひっそりと暮らしていた老夫婦の家。
寝たきりの夫と、一人で介護を担っていた妻。
高齢の為に手入れが行き届かなくなった家のあちこち。

その居間からは、勝手口のような窓がある。
そこから小さな裏庭に出ることができる。

裏庭の全貌はみえないが、いつもそこから外がのぞめるように、住人が座る椅子がある。

◆第一場◆

ある夜。

ヘルメットを被った女が立っている。
動きやすい服装にリュックを背負ったままの。

躊躇しながら、お金が入っているであろう引き出しのようなものに手を延ばす。
視線を感じて振り向くと、庭から現れた老女に驚く。

女　…びっくりした。いるならいるって…やだなチャイム鳴らしても出ないから、お母さんに何かあったんじゃないかと思って…

老女　……

老女、華やかな色のスカートをはいているが、少し裾が汚れている。

女　私です。電話くれたでしょ？

老女　…電話…

女　良かった。電話番号貼っておいて。

老女　…

女　ええ？覚えてないの？

老女　…

女　なんだー。助けてっていうから慌てて飛んできたのに。

老女　…

女　…もしかして私のことも？

老女　……

女　そう私ヘルメットさんですー（シールドを上下させたりして、以前そうしていたようにふざけてみる）

老女　…

女　前にヘルパーで来てた。お父さんにクビにされちゃった。思い出した？嘘？本当に

老女　またなの？見せて。

女　あ…

老女　……

女　…目のとこ…赤くなってない？

老女　…今は。

女　…そう。良かった。

老女　アザにならなきゃいいわね。

女　…いざとなったらほら、お母さんにもらったあの化粧の、まだあるから。あれで隠す。

老女　……

女　あれ最強。

老女　…大きい頭…

二人、クスッと笑い合う。

老女、女のどこかをさすってやる。二人にしかわからない雰囲気が漂う。

女　前もそう言って笑ってくれたんだお母さん。「いいわよ全然気にしない。ヘルメット取りたくなかったらそのままでいいわよ」って言いながら、ずっと私みて笑ってたの覚えてる？そうそう。この頭でお父さんのオムツ、交換してたら、お父さん怒っちゃって「ふざけてんのか」って。ゲンコツで殴るんだけどヘルメットだからお父さんの方が痛くて、それ見てお母さんメチャクチャ嬉しそうで。あれは？一度お父さん車椅子のせて散歩行きましょうって玄関出てすぐにハトのフンがお父さんの頭の上に落ちたこと。お母さん大爆笑したの覚えてない？

老女　……

女　ええ？

老女　……

女　…相変わらず一人？お父さんのこと、誰にも助けてもらってないの？

老女　…

女　他人に世話されるのいやだとか、言ってる場合じゃないよねぇ。

老女　…

女　子供さんからは連絡ないの？

老女　…

女　とらないの？私、代わりに連絡してみようか？

老女　…

女　…ヤバいでしょ。さすがに。え…

老女、女のヘルメットを取ろうとする。

女、自分でヘルメットをとる。

老女　何いってるか聞こえない。

女　あぁ。聞こえてなかったんだ。

老女　なぁに？

女　…元気だった？

老女　…元気だった？

女　……

老女　（背負っていた荷物を下ろさせようとする）何が入ってるの？こんな大きな。

女　…今ね、あの人と二人で訪問販売の仕事始めてて。（リュックを開ける）お母さんには凄くいいと思う。サプリメントってわかる？この小さな粒にね、ギューッて栄養が詰まってて。これ飲んだらお母さんメチャクチャ元気になるから。記憶力にも効くっていうよ。結構お値段するんだけど、お母さんだからほぼ原価で頑張っちゃう。

老女　……

女　…ごめん。

老女　元気になるの？走ったりできるようになる？

女　なる…かな。…売れなくてほんと困ってて。夜逃げでもしなきゃいけない状態で…あの人すごい荒れてて…

老女　買ったらあなた、助かるのね。じゃいただくわ。

女　……

老女　いっぱい持ってきてちょうだい。いっぱい元気にならなきゃね私たち。えっと…お金ね…

女　…お母さんに何してるんだろうね私。ホント最低。やっぱりいいわ気にしないで、

老女　えっと…お金ね…

女　ごめんなさい。お母さんの方がよっぽど苦しいのにね。私なんか全然マシなのに何甘えたこと言ってるんだか…

老女　そんなことにマシとか、あるかしら。

女　…

老女　苦しいことに、大きいも小さいもないわ。人と比べるものじゃない。

女　……

老女　いいのよ。最後かもしれないから。

女　…え？

老女　次きた時、あなたのこともうわからないかもしれないから。してあげたいのよこっちが。

女　……

老女　うちの人にやめさせられても、こうやって「お母さん、お母さん」ってたまに来てくれるの嬉しかった。

女　……

老女　何か、助けてあげられるなら。ね。

女　……

老女　おかしいんですって私。色んなことをね、忘れたりして…そうなのかしらね？あの人に言われるのよ？いやになるわ…

女　…お母さん、まだまだ大丈夫だって。

老女　見てちょうだいよこれ。この紐。この長いの。

女　なにそれ。

老女　お互いの紐を手首にくくりつけるのよ。どうしてだと思う？私が勝手にどこかに行って迷子になったりしないようにですって。

女　お母さんのこと、用事ある時に呼ぶためなんじゃないの？

老女　そうよ。私のためだっていうけど、結局は用事がある時に呼ぶし、咳がとまらなくて苦しいって言って呼ぶし……怖いことね。忘れていくって。わからなくなるって。あなたのことも。私のこともね…

女　……

女、ヘルメットを被る。

女　大丈夫だと思うよ？これで来るんだよ？私。キョーレツだし絶対忘れられない。

老女　フフ…待ってちょうだいね。

老女、お金の準備をする。

女　…（被ったまま）ここにいようかな私。お母さんも私居たら嬉しいよね？アハハ……でも前もね、あの人から逃げたけど結局見つかっちゃったからさ……。ほんと、しんどいね。…私なにしてるんだろ…最低…馬鹿みたい…毎日毎日こんなことばっかり……もう全部いやになっちゃって……

老女、うずくまるように苦しむ女に、お金を渡す。

老女　頑張って。ね。生きて。ね。

女　……

老女　（サプリメントを開けようとする）これ飲んだら元気になるのね…走れるのね…

女　（代わりに開ける）…

女、老女の手首にくくりつけてある紐の先を見て、

女　…で。お母さん、これ

老女　あの人がね、苦しかったり用事があったらすぐこれ引っ張って呼ぶの。なんでもすぐに。

女　…へぇ。

老女　自分が呼ぶくせに、私が行ったら「大丈夫か？」って聞くのよ。ほんとに…この歳になっても叩いて怒鳴って（もう耐えられないと首を横に）

女　外れてるけど、お父さんの方。

老女　…誰が外したの？

女　これじゃ呼んでもわからないね。

老女　あらやだホント…

女　…お母さん、服、汚れてる…（スカートに付いた汚れをはらう）あ、待って私が。座ってて。久しぶりにお父さんの顔見てくる。

老女　いいのよ、あの人また怒るわ…

女　また手、出されてもこれ（ヘルメット）だから。大丈夫大丈夫。

老女　待ってちょうだい…

女、寝たきりの老女の夫の部屋へ。

老女、少し落ち着きがなくなる。

ふと鏡にうつる自分をみる。

髪を整え、顔を整える。丁寧に、丁寧に。

サプリメントの容器を開ける。

やがて、女が戻ってくる。

女　…なにやってるの？

老女　……

老女、部屋にサプリメントをまいている。

女　お母さん！

老女　え？

女　…なにやってるの？

老女　餌をやってるのよハトに。

女　…お母さん、お父さんってあれ…

老女　…え…

女　…お父さん、死んでるよね、あれ…

老女　…あ…

女　……

老女　あなた、ヘルメットさん！

女　…

老女　まぁ…

女、ヘルメットを取り、そっとその家に置く。
そして老女、これからは常に静かな笑みを浮かべる。

◆第二場◆

それからしばらくの日が経ち。
夕方。
ジャージ系の服を着た新人が、外から一人で帰ってくる。
肩から老女のものらしき鞄をかけている。
慣れない家の中。
何かを踏む。ハトの餌。

新人　……

ふと、靴下の裏に付いたほこりを払い、そしていつの間にかポロシャツに付いた老女の髪の毛に気づく。

新人　……

汚い物を触るかのように二本の指でつまみあげ、自分から遠ざけて捨てる。

その行為を、奥の部屋から出てきた男に見られていた。
男はさっきまで寝ていたのか、歯磨きをしながら現れる。

新人　すみません気がつかなくて…

男　（首を振ったりして返事をする）

新人　驚かせてしまって…

男　（〃）

新人　ジローさんから聞いていただいてるかもですけど、私今日からで。びっくりですよね。私もビックリです。勿論話は聞いてはいたんですけど今日から行けないかって突然連絡入って、何もわからないまま伺ったもので。

男　（〃）

新人　あ、今ジローさんとお母さん、散歩に行って…もう戻られます。なんか私の入る隙間ない感じで、先に帰ってきちゃいました。ご存じですか？二人の…

男　（〃。ちょっと待っててと。）

男、洗面所に向かう。
新人は、まくしたてるように喋りながら、洗面所に向かう男について行く。

新人（声）　もしかして娘さんの…ですよね？あーやっぱりー。さっきジローさんから今までのこと伺ったばかりで感激。お母さんのこと心配で帰ってこられたんですってね。ねーそりゃそうですそりゃそうです。

老女、散歩から帰ってきている。

奥の声を聞いているのかはわからない。
いつも座る椅子に腰掛け、表情は見えない。
庭を見ているのか。

新人（声）　どちらにお住まいだったんですか？海外とかアレですか？そうですかそうですか。遠いと帰ってこれないですよね実際。私なんてまさに「盆と正月」だけですよ。いや「盆」もない「盆」すらないアハハハハ。お仕事のこと大丈夫ですか？皆さんそこがネックだって言いますもんね。呼び寄せるのが早いって言いますけど、親御さんには住み慣れた家が一番ですもんね。そうですかそうですか。よくお戻りになられました。親孝行だなぁ。いや私もね、子供がいますけど、絶対あの子私の老後なんか見ませんもの。こんなもんなんですかね。いや私普段はデイサービスで働いてるんですよ。でも安くてね賃金が。夜勤ある職場に移りたいんですけど、まだ子供が低学年で無理で。で紹介してもらったんですジローさんに。今多いんですよ。介護職の人、Wワークってやつです。お聞きになられたことあります？ないです？ここまで頑張って働いても老後は放ったらかし決定。まぁそんなもんですよね…あ、違いますよ？嫌みじゃないです。色々ご事情がねぇ。それにこうやって帰ってこられて偉いですねっていうことが言いたかったんです本当偉い。帰ってうちの子供に話さなきゃ。そうやって今から刷り込んでおきますフフフフフ。ちなみに何年ぶりですか？いやね、二十年三十年音信不通で、でも結局こうやって丸く収まることもあるのよねってパターンがあると希望が持てるじゃないですか。（老女に気づく）おかえりなさーい！二人でどこ寄り道してたんですか？今度私にも教えてくださいね。約束ですよー？

新人、デイサービスセンターのノリでテンションが高い。

老女　…（うるさい、と。）

新人　はいはい？
老女　…（うるさい、と。）
新人　（お口チャック）。
男　おかえりなさい、お母さん。
老女　…
男　…

微笑みあう二人。
ジローが買い物袋を下げて戻ってくる。

新人　微笑ましいー。義理の母と義理の息子が微笑みあうなんて微笑ましいー。
ジロー　あぁ、どうもどうも。初めまして。娘さんの…
男　ええ、はい。
新人　ねー。ほんと偉い。大きな声じゃ言えませんけど…実際は中々難しい。面倒なんて見れないって人が殆どですから。

女、血相を変えて出てくるが、様子を見て、すぐに穏やかになる。
（一場と服装などは変化している）

（以降、女は、この家の整理や老女の夫の遺品整理などの用事を適宜している。）

新人　戻りましたー。
女　おかえりなさい。
ジロー　私、その…公的なヘルパーではなくて、週に一度ほど、お母さんの手伝いを…

男　公的なヘルパーではない…？

ジロー　ええ。お父さんの関係で…介護サービスの人間が入るの、嫌がられまして、

男　へぇー。

ジロー　…ええ。色々と経緯はあるんですが…まぁ私たち「何でも屋」みたいな存在でお手伝いさせてもらってます。

男　あーまぁ、そうですか。

新人　ややこしい、ねぇ、ややこしい。

男　そうなの？

女　（にこやかに反応する）

新人　今、お二人が偉いわっていう話を。娘さんも偉いけど、やっぱりそれを受け入れる旦那さんも偉いですって話を今からしようと。

女　……。

新人　できないできない（普通なら）。

男　いやいや私なんか別に。嬉しいくらいですよお母さんに会えて。

新人　そうですかそうですか。いるんですねぇ、こういう、お手本みたいな人って。

男　尻に敷かれてるだけですよ。反対したらどうなるか。

女　やめてよ本当にそんな人だと思われるじゃない。

男　怖いですよー意外と。

女　ちょっとー。

新人　気をつけます。

ペラペラと、楽しそうな会話が続く。

男　真面目な話、お母さんって呼べる人がいるってことが、ありがたいというか。

新人　はー（感心）。いやー私も旦那さんみたいな人が相手だったら離婚なんてしなかった。アハハハハハハ。お母さん良かったですねー。娘さん夫婦が戻られて。

老女　……

ジロー　実は連絡とりようがなかったもんですから、どうしようかと。

女　…すみません。

ジロー　いえ…

新人　ジローさん、さっきの話

ジロー　あぁうん…

新人　お父さんも亡くなられて、娘さん夫婦も帰ってこられたことですし、今後のことをですね、ケアマネさんと相談する方がいいんじゃないかなぁと。

女　…そうですね、おいおい。

新人　以前とは状況が違いますのでねぇ。まずは介護認定を受けてもらって、そうしたらお母さんの場合色々とサービスが受けられるようになるはずですので、

女　今はまだ。結構です。

新人　…え。

女　ごめんなさい私もまだ動揺してるんです。父がなくなって何も考えられなくって。おかしいですよね。家を離れてずっと放っておいたくせに、亡くなったら亡くなったでポッカリ穴が空いてしまったようになってしまって…

新人　あ、ごめんなさい。そうですよね。お父さんっていつ亡くなられたんでしたっけ。まだ日も経ってないですもんね。

ジロー　……

女　実はまだ、決めてないんです。これからのこと。母と一緒に住むかもまだ。ごめんなさい。

新人　いえいえいえ…

女　父のこと聞いてとりあえず駆けつけたのと、あと遺品の整理や家の片付けをと思って。
新人　はい。はい。
女　あまりに物で溢れかえってて…
男　お母さん一人じゃ無理だったんだろう。いや本当に私たちの責任です。
新人　そんなそんな。
女　…
新人　（老女に聞こえるように）そんなことないですよね。戻ってきてくれただけでも嬉しいですよね。
老女　…
女　…お母さん、大丈夫？
老女　…
女　疲れてるんじゃない？散歩、ありがとうございました。
ジロー　いえいえいえ…疲れとれましたか？もしかしたら僕たちが起こしちゃったんじゃ…
男　あぁ、すみません。こんな時間まで寝ちゃって。僕だけ仕事の都合がつかなくて。夜中に着いたものですから、流石に疲れが。
新人　でしょうねぇ。
ジロー　手、洗った？
老女　ええ。
ジロー　嘘つけ。
老女　連れてってくれるわね。ジロちゃん。
ジロー　行かないよ僕は。
老女　うそ。
ジロー　嘘ってなに。行かないですよ。一人で行ってください。
老女　行き方わからない。
ジロー　わかってますあなたは。
老女　わからなくなった。
ジロー　こう行ってこうでしょ、すぐでしょ。
老女　歩き方わからなくなった。
ジロー　ダメ。
老女　ダメ。
ジロー　…人前ですよ。
老女　どこにいるの人が。
ジロー　いるでしょ近くに。
老女　ハトならいるけど。
新人　（誰かと目を合わす）…
老女　抱っこ。
ジロー　人前。
老女　いつもしてくれる。
ジロー　だめ。
老女　どうしたらしてくれる。
ジロー　じゃ、手洗ったらしてあげる。
老女　もー…

老女、ジロー、二人で手を洗いに。

三人　……
新人　…わかります。ショックですよね母親が恋してる姿って。
男　恋ですか。
新人　逆に恋以外の何物ですか。
男　へぇー…
新人　デイサービスでもよくあります。身内は驚きますよね。自分の親がこんなに積極的な人だったなんてって。孫みたいで可愛くてたまらないって

いうのから、自分以外の人にも優しくするなんてってジェラシーを燃やすまで、色々。

二人の笑い合う声が小さく響く

男　へぇー。

新人　モテるんですジローさん。

男　へぇー。

新人　なんでかわからないですけどモテるんです。意外ですか。

男　いえいえそんなことは一言も。

新人　Wワークが大当たりで。「僕、何でも屋ジローだけで食えるかも。本業のデイサービスやめるかも」って冗談で言ってますけどアレちょっと本気です。本読んでましたから「起業する時に読む本」ってやつを。

男　あぁそうですか。

新人　羨ましいですよ。私は利用者さんの心掴むのに必死に声張り上げて頑張ってるのに見向きもされず、ジローさんなんか仕事遅刻しても無断欠席しても「ちーっす」で許されちゃう人ですからね。利用者さんが抱きつきにこようものなら全力で抱きしめ返しちゃって許される人ですからね。コンプライアンスという存在を脅かす人ですからね。なんでですかね私との違い。

男　…必死だからじゃないですかね。

新人　「ちーっす」で許されますかね私。

男　どうですかね。

はしゃぐ二人の声が響く。

男　…ん？どうしたの。何つっ立って。

女　え？ううん。

男　…

その場から動けずにいた女、所在なさげに動こうとする。

新人　大目に見てあげてくださいね。

女　え？

新人　恋です恋。

女　…あぁ、はい。恋。

新人　これくらいの楽しみがないと。ずっと大変でしたもんねお母さん。

女　そうなんです。母一人に父のこと背負わせてしまって。

新人　あーいえ、責めてるわけじゃありませんので。老老介護なんてネーミングがね。実態のひどさを軽くしてますよね。ほんとに大変ですから。特にお父さんの場合は…私はジローさんから聞いただけですけど、お母さん以外誰も世話させなかったって。

女　ええ。

新人　介護サービス全部断るなんて、お母さん一人じゃとても無理ですよ。それを文句も言わずやってらっしゃったって。愛ですよね愛。

女　ええ。

新人　ケアマネさんも見るに見かねて、ジローさんに行き着きましたんでね。

女　…責任は凄く感じてるんです。やっと老老介護が終わったのに、解放されたらされたで…

新人　ちょっとね…認知症の症状がね…

女　ええ。だいぶわからなくなって…

男　まぁ今からだな。親孝行するの。

女　…そうだね。

男　いや私なんかずっと海外にいたもんですから、お母さんからしたら、

昨日からいきなり家に入ってきた赤の他人ですからね。大丈夫かなぁ。

女　…

新人　気持ちですからね気持ち。要は真心じゃないですかね。

男　まだ一言も話してもらえてないんですよ。

新人　そんなそんな。私なんか今日５０回は話しかけてますけど全無視ですから。５０回話しかけられました？なら凹んでも…あ…

新人、また何かを踏んでしまう。

新人　なにか…落ちてますよね。なんですかねこれ。さっきも私踏んでしまって…

男　……

ジローと老女、はしゃぎながら戻ってくる。

ジロー　なんだよー。結局洗わないのかよー。

老女　（笑っている）

新人　ジローさんこれ…なんですかね。

新人、拾ったものをジローに見せに行く。

男、新人が離れた隙を見計らって（周りに聞こえない状態で）、

男　お父さん、死んだんだ。

女　…

男　お母さんって認知症なの？

女　…

女、それを遮って、

女　あぁそれは、あれです。ハトのエサ。

新人　ハトのエサ？

ジロー　あーそれね。ハトの餌ね。そうそうそれも言わなきゃと思ってたとこ。

新人　（メモをポケットから出す）どうぞ。

ジロー　「ハトの餌を、掃除する。」

新人　…ハトのエサとは？

ジロー　気をつけないと、間違えてよく拾って食べちゃうから。

新人　ハトのエサ？（外を指さす）

ジロー　（家の中を差し）ハトのエサ。家ん中、まいちゃうんだよねー。

老女　（笑っている。）

ジロー　何でもかんでもまいちゃう時あるから。大変だよ、こんな小さいエサ見つけるの。掃除機で吸っちゃいけない種類のものまで投げたりするからさ。

新人　えーそれは大変だなぁ。どうして家の中に投げたりするんですかぁ？

老女　（ジローに耳打ちする）

ジロー　……

新人　何です何です？

ジロー　…お父さんがさ。ハトが家の周りに遊びにくるの楽しみにしてたからね。それでエサまくのが習慣になっちゃったのかな。

新人、コミュニケーションを取ろうと老女に近寄り、

新人　（深く何度もうなづく）そうですかそうですか。ねー。お父さんの

ために。凄いなーお母さんって。お父さんのことホントに大切に思われて…

老女　（返事の代わりに両手で新人の顔を触る）

新人　へへ…なんですか。私をヘンテコな顔にしたいですかー。おかあさーん。

老女　……

新人　どうですか。五十一回目にして今心が通じ合いました（と言ってるように聞こえる）

男　あぁ、はい。

ジロー　あれ。手洗ったっけー？だめだよ。その手でハトのフン触ったでしょ。

新人　（思わず「ひっ」「汚っ」というような声を出して避ける）

老女　んふふふ…

新人　……

ジロー　あ、車ってもしかして。玄関の横の。

男　…はい？

ジロー　動かした方がいいかもですね車。

男　車？

ジロー　あそこ、よくハトのフン落ちますんで、

男　おうおうおう…（慌てて車を移動しにいく）

新人　……

ジロー　出来たら出て右側の角を左に曲がったところに空き地ありますから、そこだとハト寄ってこないんで…

男（声）　そこまで行かないとあれですか…

ジロー（声）　そこだと停めてても文句言われないこともあって…

新人、つい、うろたえてしまったことにバツが悪く、取り繕うかのように独り言を言いながらジロー達の後に続く。

新人　…あーそういえばハト、ウロチョロしてましたね……私のバイク大丈夫かな…

老女と女の二人だけになる。

女　……

老女、新人が落とした、一粒のエサを拾い上げる。

老女　……

老女、持っていたエサの一粒を爪で弾き飛ばす。

女　やめて。

老女　…

女　聞こえないの？母さん、もうそれやめてって。

老女　どうして？

女　…ハトが来るからよ。

老女　…ハトが来るから、よ。

女　……

老女　…そうだ。あなた知ってるかしら。

女　…なに。

老女　あの人の好きな花。

女　花？花が何。

老女　お庭に植えてみようと思って。

女　…知るわけないでしょう？

女、誰か戻ってくる気配を感じて、思わずその場を離れる。

ジローが戻ってくる。

ジロー　ほんと大変で。

女　え？

ジロー　フンです。ハトの。

女　ええ。

ジロー　……

女　……え？

ジロー　似てないですね。

女　…

ジロー　お父さん似ですか。

女　ええ。…お母さん、ほんとエサやめてくれないと。みんな困ってるんだから。すぐに掃除しに行きますね。

女、そう言いながら二階に

ジロー　……

ジロー、耐えられなくてその場でゆっくり、しゃがみ込む。

新人　セーフセーフ。やばかったです。ハトのフン、タイヤのここ（僅差を示す）ですからね。ジローさん、先に教えてくれないと……ん？大丈夫ですか？

ジロー　…（とりあえず目の前にあるエサを拾う）

新人　いやいやいやいや…意外と良さげな人達じゃないですか。どんな冷酷な人達だろうって思ってたけど、普通な感じでしたよね？なかなかなかなか…音信不通って聞いてましたけど、海外に行かれてたからなんですね。

ジロー　…海外？

新人　さっき、そう。

ジロー　……

新人　会ってみないとわからないもんですねぇ。

ジロー　なんか言ってなかった？俺のこと。

新人　ジローさんのこと？

ジロー　…

新人　なぜかモテるということですか？

ジロー　…あ、そう。じゃ、いいや。

新人　…お母さん、手、洗いました？

ジロー　無理だよ。抱っこしないと無理だって。

新人　抱っこしたらいいじゃないですか。

ジロー　…

新人　…それでもちょっと気をつけないとですね。モテるのもほどほどに。何だかほんとに恋人同士みたいでしたからね。「コンプライアンス」って言葉、一度も聞いたことない人ですかね？いつか問題になるんじゃないかと…

ジロー　新人さん。

新人　はいはい。

ジロー　この家任せて大丈夫だよね。

新人　…ん？私…私一人ってことですか？

ジロー　そうそうそう、

新人　無理無理無理。え、ジローさんと交代で入れるようにって、

ジロー　そういうつもりで声かけてたんだけどね。…ほら。そう見えないけど人気あるから俺。なぜかモテる人だから。

新人　無理だわー無理。恋愛対象の代わりにはなれないですってー。
ジロー　それもね。あるんだよ。さすがにちょっと距離とらないとなって。
新人　…あぁ……いやいやいやいや、
ジロー　問題でしょ？コンプライアンス的に。
新人　え、そのこと（お母さん）知ってます？
ジロー　……

老女、窓の外をずっと見ていて、話を聞いていないように見える。

ジロー　あぁ、大事なこと先に…
新人　納得されますかねぇ。お父さん亡くなって落ち込んでる状態なの、ジローさんいることで紛れてるわけでしょう？それが…ええ？私で事足りるわけないと思うなー。
ジロー　毎回ここから取って行ってもらったらいいから。
新人　はい？

ジロー、その家の一角、お金が入っているであろう引き出し（場所）から、適当にお金を取る。

新人　……
ジロー　はい。

その中から一枚、新人に手渡す。

新人　…え…
ジロー　お疲れ様。
新人　……何ですかこれ？
ジロー　大丈夫だから。あそこから取っていってくれたらいいから。
新人　……
ジロー　ほい。今のうちに取っといて。
新人　えーっと…
ジロー　…ハトのフン、掃除しとかないとまた近所の人に…
新人　いやいやいやいや…ん？あ、ん？ちょちょちょちょ…
ジロー　ハハ…フン掃除が一番きつかったりして。あとはやっぱり散歩かなぁ。散歩大事ね。無理矢理でも連れ出さないとずっとあそこ座ってるから。他のことは娘さんともよく話した上で…

新人、ジローを追いかけて玄関へ

老女　……

◆第三場◆

その日の夜

老女はずっと窓の外を見ていて表情は見えない。

女と男の二人は一見楽しそうに、夫の部屋から荷物を運ぶ。

男　大丈夫大丈夫。
女　そんなことしなくていいって。
男　するって言ったじゃないの親孝行。義理の息子が。しますよ。させて

くださいよ。…（笑いがこみ上げてくる）なんでなんで。びっくりしたってもう…

女　（笑う）

男　なんで娘ってことになったの。

女　…咄嗟に話、合わせただけ。どうせすぐいなくなるから、誤解、解かないでもいいかと思って。

男　わかるわかる。俺も咄嗟に合わせた。……合わせるなアリャ。あの凄いテンションでガンガンこられると人の自我って壊されるわな。別世界に連れて行かれるわな。

女　（笑う）

男　必死。もうこっちも必死。な？

女　（笑う）

男　どういう状況かわかんないからバックバク。間違ったところで相づち打たないように探る探る。

女　大丈夫だった。

男　ホント？大丈夫？

女　上手だった。

男　イエーイ（いやっほーい等でも）

女　…

男、ハイタッチを強要し、そのままの位置で離さない。

男　いやほんと、面白かった。ディス・イズ・A・ペンだかディス・イズ・THE・ペンだかわかんないのに、海外に住んでることになっちゃっって。

女　……お母さんが（見てるから離せと）…

男　……（離す）

二人、老女を見るが、老女は窓の外を見たまま。

男　お母さーん。初めまして。息子ですよー。…ダメみたいだな。まだあれだ五十回に達してないんだな。お母さん。お母さん。ちょっと…

女が荷物を運ぼうとしていたのを止める。

男　…それ。ちゃんと見た？金目のもの入ってないか。

女　何だか気持ち悪くて。

男　何が気持ち悪い。歳をとるとね、ビックリするようなところに金目のもの隠したりするもんなんだから…これとか売れるんじゃないの？……

袋の中から遺品を取り出し、置いていく。

男　（日記を出し、お札が入ってないか、逆さにして確認する）何これ。日記。…わー。読める？これ…

女　…お父さん、寝たきりだったから。

男　…あぁ。

女　それでもよく書けてる方だと思う。

男　お母さーん。日記、捨てちゃっていいのー？

女　…いいから。

男　どうして。

女　お母さんが読むこと、ないじゃない。

男　だからって捨てるか？すぐに。どうするの。本当の子供が帰ってきたら読むでしょ。

女　（帰ってこないと首を振る）

男　なんで。

女　もう何十年も帰ってこないのに。奇跡的に現れるなんて考えられない。
男　わかんないよ。
女　（〃）
男　なんで帰ってこない。
女　若いときに出て行ったきり、帰ってこないって。お母さんがまだしっかりしてた時、そう言ってた。
男　……
女　二階にまだそのまま残ってる。娘さんの荷物。…かわいそうにね。実家がこんなことになってるなんて思いもつかないんでしょ。…心配にならないのかな。親がどうしてるかって。
男　…
女　薄情なものね。
男　え、どっちがかわいそうって？
女　お母さん。
男　…そうでもないんじゃないの？ねぇお母さん。ジロちゃんがいるもんね？…アレって本当にアレなの？本当に恋しちゃったりしてんの？
女　さぁ。
男　ちょっと流石にビビったな。おいおいおいおいって。本人アレでしょ？自分がジロちゃんと恋愛対象になるって思ってるわけでしょ？若いつもりなんだよね？鏡ないのここ。あるじゃん。見せないと。
女　（顔のみで笑っている）
男　なんで笑ってる。
女　（〃）
男　なんでずっと笑ってる。
女　え？笑ってる？私が？
男　鏡みたら。
女　（〃）
男　なんで逃げた。
女　逃げてない。
男　…
女　ほんとに。困った時いつも買ってくれるから来ただけ。そしたらお父さんが…放っておけないでしょ、（お母さん）あんな状態なのに。
男　…（俺のことは）
女　連絡取りようがなくて、
男　携帯、
女　携帯もいつの間にかなくて。お母さんがきっとどこかに持っていったんじゃないかと思う。
男　…何言ってんの？
女　ほんとだって。気がついたらなくなって…
男　（自分の携帯を取り出し、かける）
女　…なに。
男　探してる。

かすかに、かすかに音がしている気がする。
その音を探すが、わからない。

男　携帯がなくたって、
女　でも目、離せないから。だって寝たきりのお父さんが（遺品の中から、紐を取り出し）こんなもの使ってお母さんの徘徊止めてたのに、…ええ？なに？おかしなこと言ってるかな私。
男　……
女　…そろそろ戻らなきゃって思ってたとこ。

男、くつろげる場所に腰掛ける。

男　いいよん。
女　…
男　いいよん。俺。
女　え…
男　息子になっていいよん。
女　…
男　家あるって、最高。転々としなくていいって最高。ここってあれでしょ？いつも買ってくれるって言ってた小金持ちの家でしょ？前に俺が羽毛布団運んだとこでしょ？
女　（頷く）
男　最高。
女　…
男　って思ったから娘とかのフリしたわけでしょあなたも。わかるわかる。違う人間になってスタートできるなら、俺だってそっち選ぶかも。
女　……
男　いいよん。
女　……
男　そうしよ。ちょうどいいよ。ちょうど母親いないし。
女　……
男　え、大丈夫かな？海外で働いてたって嘘バレないよね。ディス・イズ・A・ペンですかそれともディズ・イズ・THE・ペンのどちらの英文が正しいですか？とか聞かれないかな？聞かれたらどうやって答えたらいいの？結局どっちなの？
女　……（笑う）
男　笑うなって、

男、遺品の中から取りだしていた筆記用具を女に（女の横に）投げつける。

女　……
男　…ディス・イズ・THE・ペン。
女　…（平静を装うように）嘘でしょ？ほんとにわかんないの？
男　……
女　…娘さんの部屋の片付けもちょっとね。何だか気が引けるけど。ほんと全然終わらない…

女、何事もなかったかのように、娘の部屋があるだろう二階に行く。

男　…お母さーん。

老女は相変わらず。
男は、取り出した遺品を戻しながらも、日記を手に取り、読む。

男　…「今日も　誰とも　話さなかった」
…「今日も　誰とも　話さなかった」
…「今日も　誰とも　話さなかった」

老女、窓の外を見ながら、呟く。

老女　…今日も誰とも話さなかった…
…今日も誰とも話さなかった…

男と老女は、それぞれの世界で呟き、重なりながら繰り返す。

男　「ハト。ハトが来た。」
「生き物が、そこにいる。ささやかな、命が、そこにもある。胸が熱くなった。久しぶりに、あたたかな何かに包まれた気がした。」
「妻も、ハトの音を聞いていた。」
「この、小さな世界が私の全てだ。」
「私たちはまだ、生きている。」
「ハトが来た。私たちはまだ、生きている。」
「ハトよ…私たちは、生きている…」

男、幼い頃、そうやって母を待っていたように、膝を抱え込み、うずくまる。

老女　この、小さな世界が私の…ハトよ…私は…

老女、夫から受けた感情が思い出される。
苦しさや怒りをそっと何かにぶつけながら（例えば足をゲンコツで叩くという行為）。ずっとそうやって、小さく吐き出しては麻痺させ、耐えてきたであろう行為を。

男　「なにも食べていない」
「今日も食べていない」
「外に出たあと、何時間も帰ってこなかった」
「今日から手首に紐をつけることにした。もう片方は私。」

老女　…「ごめんなさい　あなた」
…「ごめんなさい　あなた」
…「ごめんなさい　あなた」

男　「妻の髪　ホコリをとろうとしたら　妻が怯えた」
「そういえば　妻はいつも怯えていた」
「いつも私は　妻を傷つけた」
「妻はいつも　心なく　笑っていた」
「私はいつも」…

老女　…「ごめんなさい　あなた」
…「ごめんなさい　あなた」

男　「私は　いつも」…

老女　「ごめんなさい　あなた　はやく」
「ごめんなさい　あなた　はやく」

男　「今日もハトを待っていた。この時間だけは、なにも話さなくても二人で同じ気持ちになれた」

老女　「あなた　はやく　死んで」

男　「ハトと妻がいれば幸せだと思った」

老女　「はやく　死んで」
「お前が　私と娘にしたことを　絶対許さない」

老女、苦しくなって立ち上がる。振り返り、その部屋にいた男に気づく。

老女　…え…

男　どうしたのお母さん。

二人、微笑みあう。

男　あれ。やっと五十一回目かな。
老女　はじめまして。えーっと…
男　はじめまして。あなたの息子です。
老女　あぁそう。
男　…僕もね、小さかった頃、大切な人が出て行ったんだ。
老女　そう。
男　僕たち、いい親子になれるかな。
老女　あなたと？
男　そう。
老女　あなた、おじさんじゃないの。
男　そうだね。お母さんまだ若いもんね。
老女　えぇ、まぁ。

男、躊躇しながらもそっと老女の頬に触れる。

男　こうやって、ほっぺたに触ることだけは許してくれたんだ。
老女　……
男　きれいだね。お母さん。…自慢の母さんだった。
老女　…。
男　一度だけ、授業参観に来てくれたことがあった。飛び抜けて素敵だったね。
老女　一度だけ？
男　そう。気がついたら…いなかった。
老女　どうして。
男　きっと…自分のためにね。
老女　じゃあ仕方ないのね。
男　……今頃、こんな風にシワとか、シミとか、ほうれい線がどうだとか、膝が痛いだとか言って、
老女　やだわ（冗談だと思う）
男　（笑う）
老女　…あなた手、洗った？
男　……
老女　そうね…

老女、遺品の中の紐を取りに行く。
そして、男の手首に紐を巻いていく。

男　なになになに…
老女　もう片方をね、巻くの。どこにも行ってほしくない大切な人に。
男　…
老女　わかるかしら？どこかに行こうとしたら、これでグイッと引っ張ればいい。
男　お母さん、紐で引っ張らなくても今の時代は携帯というものがあってね、
老女　これで安心。どう？
男　…（老女に、軽く巻く）これで安心。
老女　私？あなたに大切にされる覚えはない。
男　大切にしたくなった。
老女　いやだ…こんなおじさんに…
男　歳をとるとね、人を大切にしたくなるんだ。
老女　そういうもの？
男　気がついたら、僕の周りには人がいなかった。
老女　……
男　うん。（自分で）わかってるんだ。

老女　……

老女、男を連れ、並んでどこかに座る。
やがて、

男　（うれしそう）
老女　ええ？
男　いや…ほんとだ。安心だね。
老女　私たちこうやって、ただハトを待つの。…
男　なんでそんなこと。
老女　どうしてかしらね。ずっとこうしてたから…ずっとこうしてなきゃいけないんじゃないかしら。
男　なんだそれ。
老女　おかしい？
男　…僕もだな。ずっと待ってたから。ずっと誰かを待ってなきゃいけない人なんだと思う。
老女　…
男　おかしいよね。
老女　…なんだそれ。

二人、クスクスと笑う。
男、ふと老女の髪の毛についたゴミを取ろうと手を上げる。
咄嗟によける老女。

老女　…やめてちょうだい。
男　え…いや、頭にゴミが…
老女　…叩いて…掴んで…投げて…
男　違う。違うって。
老女　そう言ってブツじゃないの…寝たきりになっても終わらなかった…
男　しない。もうしないよ。

老女、男に背を向ける。
男、後悔の念が再び押し寄せる。そのまま男の対象は女に戻り、階下に向かう。
老女、ふと、窓の外が気になって、近くに進む。（軽く巻かれていた紐は外れる）
男、階段の下から二階に向かって次のような声をかけながら、足早に女のもとに駆けつけようとする。

男　なぁ。さっきは悪かったよ。痛くなかったか？当たってないだろ？ちゃんと当たらないように外したんだ。

ズルズルと、男の手首から垂れている紐が階段を上がっていく。

老女　……

夜の庭。
小さな光が不規則に動いている。
老女、ギョッとしながらも、その光の正体を見ようとする。
暗闇に、人の影。

老女　え…

懐中電灯で顔を下から照らしたジローが浮かび上がる。

ジロー　僕でしたー。

老女　ジロちゃん！

老女、再会を喜び、庭から部屋へ招き入れながら。
ジロー、庭をもう一度見てから家に入る。

老女　もうーほんとにジロちゃんは…

ジロー　ビックリした？

老女　寿命が縮まるじゃない。どうしたの一体。

ジロー　うーん。いるかなぁって思って。

老女　いるわよ何ー。

ジロー　そこにいるとは思わなかった。何ー。

二人、笑い合いながら、

ジロー　（娘夫婦を気にして）シッ…

老女　こんな時間に逢うなんて。

ジロー　サプライズですよ。

老女　ジロちゃんらしいわね。

ジロー　嬉しいでしょ。でしょ？

老女　ええ。とても。

ジロー　……

老女、お金を取り出してジローに渡す。

ジロー　いやいや…いい。

老女　どうしたの？遠慮しちゃって。ジロちゃんらしくない。（無理矢理渡す）

ジロー　…

ジローも無理矢理受け取るが。

老女、ジローに触れようとするが、ジローは避ける。

ジロー　（冗談のように笑いながら、どうにか）いやいやいやいや…

老女、ジローが笑いながら避けているので、遊んでいるのかと思い、そのやりとりを楽しむ。
冗談か本気かわからない追いかけっこ。

ジロー　ははは…キモイキモイキモイ…

ジロー、老女には聞こえない声量で、時折、聞かせられない言葉を吐き出す。

ジロー　ははは、やめてくれよ。気持ち悪いって…勘弁してくれって……わー捕まったー。

老女　（嬉しそうにしている）

老女、ジローの体のどこかに顔をうずめる。

ジロー　…

老女　今日は、変ね。

ジロー　…僕ね、好きですよこの仕事。

老女　ええ。

ジロー　じいちゃんばあちゃん、やっぱりさすがでさ。心広いっていうか。目の前であくびしても笑ってくれるし、普通じゃありえないでしょ？お客さん接客しながらあくびだとか。みんなどっかで寂しいからさ、俺でも受け入れてくれるじゃない。

老女　そうね。

ジロー　この仕事して、ちょっとした人気者になって、初めて社会に受け入れられた感じがね。あったから。利用者さんのためにってことは考えてなくて、自分の為にね…そう。初めて将来のこと、目標持ってみようって思って。

老女　ええ。

ジロー、老女から逃れる。

ジロー　同僚でもさ、たまにいるわけ。自分で事業所立ち上げたりする人とか。今までの自分だったら、あぁそういう凄い人もいるんだなって感じなんだけど、もしかしたら自分だってイケるんじゃないかって初めて思った。

老女　そうね。ジロちゃんならきっとうまくやれるわね。

ジロー　立ち上げるにしても仲間が必要でしょ？副業必要な人探してさ、最近引き継ぎとか始めたばかりなのに…

老女　そうだったの。

ジロー　え、お父さんってどうしたの？

老女　…

ジロー　あ、いや…ちょっと流石にそれは怖いっていうか…

老女　…

ジロー　だってさ。次の週に来たら、お父さんいなくなってるじゃない。跡形もなく。そんなことある？え、音信不通だった娘とどうやって連絡とった？あ、実は連絡先知ってたのか。そうかそうか。え、ほんとにあの人ってアレ？…あれ？何言ってんの俺。ごめん気にしないで。

老女　…

ジロー　ごめん。気になる。

ジロー、うずくまる。

ジロー　…ヤバいかもー…

老女、そばに寄ろうとするが、ジローは察して距離をとる。

ジロー　来んなって。

老女　……

ジロー　頼むからさ。俺関係ないからね？ちゃんとそう言ってくれるよね？…いや逆に大丈夫か。何言おうが周り信じないもんね。そうかそうか。じゃあいいか…

老女　……

ジロー　掘れって言ったんだよアンタが！だから掘ったんだよ。花壇つくるからって。掘っても掘っても「まだ掘れ」「まだ掘れ」「もっと大きく掘れ」って。え覚えてるよね？

老女　……

ジロー　そんなに掘って、もちろんおかしいとは思ったよ？でもさ。そり

ゃ、わけわかってないんだと思って。とにかく三時間、ばあさんの言うとおりにしなきゃなと思って。だから掘ったんだよ!違う?

老女　……

ジロー　…勘弁してくれよ…

老女、ジローから目をそらし、背を向ける。

ジロー　え、え、え、ねぇ聞いてた?わかってる?

老女　……

ジロー、態度を変えて、老女を抱きしめる。(しがみつく)

ジロー　誤解しないでよ。いざとなったらって話。俺からは何も言わないよ。でも誰かに聞かれたら、ほんとのこと言ってほしいって話だから。

老女　……

二階から人が下りてくる気配を感じ、ジロー、慌ててその場から逃げる(入ってきた所から)。

男　…誰か来てたよね?声が…

老女はジローが去って行った一階の出入り口(窓)から目を離せずにいる。

老女が何かしら動揺している様子を男は感じる。

男　どうした?

老女　……大丈夫。

男　え、誰?

老女　…ジロちゃんのこと…責めないでちょうだいね。

男　…

老女　ジロちゃん、ただ、抱きしめてくれただけ。

男、近くに落ちている「お札」を拾い上げる。

男　……

老女　…ねぇ、今、あそこから…あの子が…

男　…

男、ジローを追って家を出る。

老女　…あの子…あの子が…

老女、ジローが一階の窓から逃げる姿に、以前の子供の姿を見たようだ。

老女　またあそこから出ていった…あの子が帰ってきたんですよお父さん…ちょっと…お父さん!

老女、振り向くと誰もいない。

老女、「お父さん」には構わず、「あの子」の姿を追うために外に出て行く。

◆第四場◆

それから十日ほど経った家。

この家の不要物を運びだしている女。

新人、もはや新人ではない。スタイリッシュジャージを着て、頭にはサングラスを引っかけ、携帯で誰かと話をしている。

途中で女に会うと、地面におちているハトのフンを拾いだしたり片手間に仕事し、体裁を整えたりしながら喋る。

新人　（携帯）考えてくれた？まだ？そうだよねまだだよね。手応えだけでもちょっと聞いとこっか？…そりゃそうだよそりゃそうだよ。…週一とかでいいよ？いいよ全然。お休みの時だったら昼間入れるし、私なんかデイ終わってから入ってる。今だったら選べる。…ねー。そっちも土日やってるもんね。だから平日休みでしょ？平日昼間必要な人もいるから…わかったわかった。うん。悪いけど急ぎ。ほんと困ってんの。じゃあね…

運ぶ作業している女と目が合う。

新人　（ほんと困ってますといいたげな表情などで、悪びれず会釈したりして）どうも。あと、一件だけ…

女　どうぞ…

新人　（携帯で）ありがとー今聞いたー。大丈夫？ごめんねー急に人手が必要になっちゃって。ほんと参った…やだ、やだやめてやめて。部長なんてガラじゃないし。ついこの前まで「新人さん」って呼ばれてたんだから（大声で笑う）部長じゃないしー（〃）新人部長ー（〃）

新人、女に見られ、自粛して適当に電話を済ます。

新人　すみません、ほんと色々と…

女　大変ですね。

新人　ご迷惑かけてます。

女　素敵なアレ（服装）ですね。

新人　ありがとうございます。

女　必要なんですか？それって…

新人　（サングラス）ええ、散歩の時にサッと。すぐかけられるように。

女　あぁ。散歩に。

新人　今日は確かに必要ありませんでしたね。

女　なるほど。

新人　…いい旦那さんで。

女　ええ。

新人　あんなに義理のお母さんに尽くされる方、始めてです。普通、デイでお迎えに行っても出てこない方ほとんどです。

女　好きでやってるだけですから。

新人　へー。好きで？

女　ええ。

新人　いるんですねーそういう方。私の周りにはいないです。アハハハハ。…お二人とも、そろそろ慣れました？この環境に。

女　…え？

新人　日本に戻られて

女　あぁ。ええまぁ。

新人　急に場所が変わると色々とねー。

女　大したことじゃないです。場所が変わっただけで。何も変わらない。
新人　…いいなぁその順応性。どこでも生きていけますね。
女　そうですね。
新人　私枕が変わると寝れない派です。羨ましい。
女　ここに来てどれくらいでしょうね…
新人　かれこれ二週間程度…二週間程度で部長って異例の出世。
女　慣れますよ。最初からそうだったみたいな気がしたりして。
新人　確かに慣れてる自分が怖い。生まれた瞬間部長だった気さえしてます。
女　どこでも生きていけそうですね。

外から老女、男が戻ってくる。庭から。

新人　おかえりなさーい！
男　途中、ちょっと雨降ったから。早めに。
新人　手、洗いましょっか。今日は何にも触ってないですかね…ありがとうございました。
男　母さん、早い早い。
新人　凄いなぁー。そのうち競歩大会とか参加できるんじゃないですか？こういう。こういう。
男　…なんか今日、違いますよね。
新人　バレました？
男　ハツラツってこういうことを言うんですね。
新人　バレました？
男　高そうな服。
新人　新調してみました。
男　…それって必要ですか？（サングラス）
新人　私、何でも外側から固めていくタイプで。意志は後からついて行くと。悲しいから泣くんじゃない泣くから悲しくなるんだよと。楽しいから笑うんじゃない笑うから楽しくなるんだよっと…良かったらこれを。

新人、ここぞというタイミングでポケットから名刺入れを出し、二人に渡す。

男　…名刺、ですか…
新人　知ってます？今、名刺って発注してから三時間で届くんです、お手元に。
女　…部長…
新人　仕方なくですよ部長って。実際は勿論新人ですけどね。新人って書くわけにもいかないから。アハハハハ。そりゃそうだ。
男　それで…聞かれたんですよね？
新人　はいはい。結構みんな好反応というか。興味持ってくれまして。
男　…いやいや。
新人　あ…Wワークじゃなくですね。えーっと…いやほんと大変で。ジローさんいなくなってその穴埋めるのが…私一人でどうしますかっていう…いきなり部長に昇格って…えー

新人、手帳をめくりながら、

新人　ジローさんが行かれてるお宅、半分は高齢の方お一人暮らしなんです。…お金ちゃんと管理されてますか？多めにいただいてるとかないですか？と聞きましたらですね、そうかもしれないけど自分が勘違いしてるだけかもしれないしという反応で。
男　（いらだつ）…

新人　「そうよいつも多めに渡してるのよ」という方もいます。…中々、証言をとるのも難しいところで。

男　え、よそのお宅から実際苦情が来たんでしょ？じゃそれが決め手じゃないですか。

新人　それが、そこも結局穏便に済ませたいということで…

男　母さん。ジローっていう人、いつも勝手にお金とっていったんだよね？

老女、相変わらず背中を向け、窓の外をみている。

老女　（首をかしげる）

男　いつもいくら持っていくの？必要以上に持っていったんじゃないの？

老女　（〃）

新人　それは、はい。こちらのお宅は私が証人ですので。

男　困りますよ。普通じゃない。

新人　まったくです。

男　問題でしょ？

新人　大問題です。

女　それでも、ちゃんと報酬のことは明確にしてもらわないとですよね。

新人　それは、はい。勿論です（手帳に書き留める）勿論明瞭会計…契約書作ってきますので。

男　うちだけの話じゃない。他のお宅のこと考えたら…中々声あげづらかったのかもしれないな。弱い立場の人だからそこにつけ込んで。

新人　それがですね…「そんなことより、ジロちゃんはいつ来るの？」っていう声の方が多くてですね。「それでもいいからジロちゃんに来て欲しい」っていうもんだから私の立場ありません。アハハ。

男　だからいいって話じゃないで、

新人　ですよね。絶対ダメな話です。

男　お金のことより僕が言いたいのは、

新人　ほんとにそれは、はい。ひどい。部長として心から謝罪を、

男　あなたに謝ってもらったってしょうがない。

新人　はい、それはそう。

男　目の前であいつが謝罪したって許せますか？

新人　許せない。

男　もしあなたのお母さんがと考えてみてくださいよ。母さんのこと抱きしめてたんだから。

新人　（頷くしか）

男　人として一番やっちゃいけないことでしょ？どうですか。

新人　（〃）

男　あれから逃げたままだっていうのが物語ってるでしょ。やましいことしてる自覚があるってことでしょ。お金のこと、過剰なスキンシップで年寄りの気を引いてたこと…徹底的に調べてくださいよ。もしかしたら他にも犯罪まがいのことしてる可能性ありますよ。

新人　（〃）

女　お母さんが可愛そうで。

新人　ええ。

女　ジローさん来なくなってから特にです。一人で歩きに出るんです。

新人　あぁ…

女　ずっと窓の外見て。いつ一人で出て行くか目が離せなくて。探しに行ってるのかもしれませんジローさんのこと。人を追いかけるように出て行こうとするから。

新人　ですか…

老女がまた立ち上がろうとしたので、新人、老女に近寄り、ハトのエサを渡す。

新人　はいはいはい。お母さーん。今日エサってまきました？ねー。エサでも撒きましょうか。

老女　（部屋に撒こうとする）

新人　部屋じゃなくて、外にね外。鬼はー外。ほいほい。福もー外。一粒ずつ一粒ずつ。そうそうそう…

男　…え？お前は許せるの？

女　……

男　腹がたたない？

女　なにに？

男　何に？

女　関係ないじゃない。

男　母さんだぞ。

女　ええ？

男　ええ？

女　…楽しそう。

男　え？

女　久しぶりに見た。そんなに目の色変えて。

男　…

女　興奮。覚醒。熱狂。…熱望。

男　……

女　いいことだって言ってるのよ。

男　……

女　ハツラツってこういうことを言うのね。

男　…お前…

新人　（庭の）あれ、なんか植えました？新芽じゃないかなこれ。何の種まいたんですか？

女　…さぁ。エサしか撒いてないですけど。

新人　あらまぁ。エサから芽が出るなんて。

女　（庭に向かう）そっとしておいてください。

新人　はい？

女　なに撒いたの？お母さん。楽しみね。

老女　……

女　…ほんとに見たの？ジローさんがお母さんにそんなことするかな。

男　嘘ついてるって言いたいのか。

女　寝ぼけてたんじゃないの？

男　（立ち上がる）

女　人は見たいものしか見ないものよ。

男　…え？俺が何を見たいって？

女　…重ねてしまったということでしょお母さんに。あなたも私も。

男　……

女　いいのよ。そうやって生きてくしかないんだから。

男　…変だよ、ここに来てから。

女　忘れてた私。あなたのホントのお母さんも、男の人追いかけて出て行っ…

男のちょっとした体の動きに、女、つい防御反応がでる。勘違いだと気づくが、手持ち無沙汰になったその両手で顔を塞ぐ。

老女、エサを撒き終わって部屋に戻る。

老女　……

女　（塞いだまま、自嘲する）

新人　…あれ。なんか険悪な雰囲気ですか？（自嘲の真似をする）……なつかしいー。なつかしいです夫婦喧嘩。こうやって離れてみると、これもいい思い出。家族だなー。

女　こんなのが家族ですか？

新人　ですです。思い出したくもない。

女　この人の方が母に必死で。ほんとの息子みたいでしょ？

新人　ほんと珍しい。羨ましー。

男　……

新人　…あのー。ちょっと見てもらえます？

男　はい？

男、部屋を出る。

女　（老女に）ジローさんのこと、お金のこと、ほんとに何もわからない？

老女　……

女　…ねぇ。ジローさんって何も知らないのかしら？私のこと「似てない」って言ったのよ。「お母さんと似てない」って。何か気づいてるんじゃない？

老女　…

女　…〝こわい〟って言ってたでしょ？あの時。忘れていくことが怖いって。今はどう？

老女、背中を向けたまま。

女　（老女の正面に回り込む。髪を整えてやるなりして）忘れていく方がよっぽどラクじゃない。私もう、どうにかなりそうで…え…

老女、なにか、手を動かしたようだ。

女　え？（口に指を立て）「しっ」って何？

老女　……

女　……

女、老女が顔に指を近づけた行為を、「黙ってろ」という合図なのだと汲み取る。

女、老女が全てわかっていて「わからないフリ」をしているのだと感じる。

新人　あのー…

女　え？

新人　ここにあるのって…ゴミじゃないですよね？

女　…

新人　写真、入ってますけど…

女　あぁ…

新人　家族写真。

女　…

新人　…

男　ゴミと間違えるよねこれじゃ。この袋じゃ。

新人　危ない危ない。

女　ごめんなさい。

新人　可愛い頃ですね娘さん。何歳です？三歳？四歳？

女　いつ頃だろ。

新人　なんか面影ないですねー。

男　変わりますからね。

新人　わかりますわかります。私も変わり果ててのこれですから。…それにしても…（見比べようと）

女　……

男、新人から写真（もしくは写真立て）を取り、老女に見せようとする。

男　懐かしいでしょ母さん、この写真。あとで母さんに見せようって取っておいたんだ。なぁ。

女　（うなづく）

男　どこ行った時か覚えてる？

老女　……

男　動物園じゃないかな。

新人　動物写ってないですけどね。

男　柵があるから。

新人　動物園行って動物の前で撮らないで動物のいない柵の前でわざわざ撮りますかね。

男　それはタイミングの問題だから。

新人　柵というだけで果たして動物園ですかね。植物園に柵はないですか？遊園地に柵はないですか？いや近所の公園にだって柵はあるんじゃないですか？

男　うるさい人だなホントに。

新人　柵イコール動物園というのは、

男　柵イコール動物園じゃないですよ。この柵見てくださいよ。

新人　この柵見てくださいよ？柵という柵について中々造詣の深い人が使う言葉ですが、

男　いやいやいや、

老女、写真を取り、見る。

三人　……

新人　…シャッター押したの、悪意のある赤の他人なんでしょうね。タイミング悪すぎです。

男　いいからあなたは…

新人　動物どころか三人ともバラバラの方向見てる時に適当にシャッター押してますねこれ…

男　いいんですよ。

新人　悪意に満ちてる…

男　バラバラでいいんです。家族ってそういうもんでしょ。

新人　…

男　なんですか。

新人　いや、今格好良かったからイラッとしてしまって。何でだろう。うっかりうっかり。

男　イラッとって…

新人　そうですそうです。家族ってこういうもんです。家族写真ってこういうもんです。

男　さっきからあなたも態度が変だなぁ。部長になった途端態度が変わったなぁ。

新人　立場が人を変えるって言いますもんねー。

老女、無表情に写真を胸に当てる。

三人　…

新人　（老女に）何か思い出しました？…大切な思い出だってことはわか

るのかもしれないですね。娘さんと、お父さんと三人で出かけた写真ですもんね。

老女　…

男　（老女の頬を何気なく触りながら）動物園でさ。いっぱい弁当用意して連れて行ってくれたのに、全然目当ての動物出てこなかったから母さん不機嫌になったりして。じっと檻の前で二人で待ってたんだよ。

新人　…ん？

男　楽しかったなぁ。

新人　…えーっと。

女　楽しかったんです。

新人　へぇ。独特な楽しみ方ですね。

男　楽しかった。

新人　え、旦那さんの話ですか？それ。

女　もういいわそんな昔の話。

新人　…

女　その袋、捨てようと思ってたのに置いたままになっちゃって…（捨てようとする）

新人　他には何入ってるんですか？この袋…

新人、写真が入ってあった袋の中を取り出す。

新人　あぁー。娘さんの。

実の娘が以前、身につけていたものを取り出す。

女　小さい時のもの殆ど取ってあって。

新人　大事に取ってたんですね。お母さん。

女　底が抜けるんじゃないかってぐらい一杯ありすぎて。片付けても片付けても終わらない。

新人　どうしましょう？捨てますか？これ。

老女、首を横に振る。

新人　だそうです。

女　まだいっぱいあるのよ母さん。古いもの捨てていかないと新しいもの入ってこないって。どうするの？こんなの置いといて。

老女　（自分で身につける）

三人、老女の茶目っ気のある行動に微笑ましく思い、それぞれ反応する。

新人　新しい…写真撮りますか？家族写真。

男　あぁ。

新人　ねぇ。

男　そうしよう母さん。

新人　せっかく家族揃ったんですもんね。…お父さんいなくて残念ですけどね。

老女、庭を背にした位置（庭の一部が写真に写るように）に移動する。

新人　え、そこがいいんですか？大丈夫かな…逆光じゃないかな…

女　（男に手招きされて）いいわ私。

男　娘が入らなくてどうするんだよ。（無理矢理連れてくる）

女　…

新人　柵も入らないですけどいいですよね…はい！

三人、まだ準備している段階で携帯で写真を撮る。

男　…え。

新人　…バラバラでいいんですもんね…家族写真ってね…

男　…あなたこれがやりたくて撮ろうって言ったんだな。

新人　赤の他人が悪意に満ちていることを証明したくて。…はいはい。撮りますちゃんと。いいですか…何枚か撮りますからね…

新人、「自撮り」の状態で自分を入れながら、適当なところでシャッターを押しながらしゃべり出す。

新人　…ここのご家族さんはいいですよ。色んなお宅見てますけど何が辛いかって、同居してても…一日中声もかけられないで疎ましく思われながら介護を受けてる方とか…いますからね普通に。そういうのはホント、胸が痛みます…

男　…ちょっとちょっと。撮る時教えてくれないと。

新人　色んなご事情ありますんで何も言わないですけど。こちらみたいにこうやって…お母さんお母さんって自分のこと呼んでもらえることって一番嬉しいんじゃないかな。存在がなかったことにされるのは辛いというか…

…ジローさんみたいに親密になって相手してくれる人についついね……あ、いや、ごめんなさい。擁護してるつもりは全然。

男　さっきからやめてもらえないかな自撮り。

新人　あ、え？

男　なんであなたが入るかな家族写真に。

新人　他人は入っちゃいけないんですか？

男　家族写真なんだから。自分で「他人」って言ってるじゃないですか。

新人　あ、お母さんいい顔。

新人、不意に三人の写真を撮る。

男　…何だかあなたに振り回されてるな。

新人　あぁ普通に撮ってしまった。バラバラの家族写真を…お母さんが幸せそうに見えたからつい…

男　母さん、嬉しいね。

老女　……

男　僕も嬉しいよ。

女　……

男　これからはさ。いっぱい撮ろう家族写真。

新人　呼んでいただければいつでも。

男　母さんの行きたかった場所とか、やりたかったこととか。（新人に）何がありましたっけ。家族で盛り上がることって言ったら…

新人　正月節分ひな祭りこどもの日、七夕、お盆、お月見、ハロウィン、クリスマス、

男　そうそう、そういうの。凄いな。即答だな。

新人　名刺ご覧になってください。「レクリエーション介護士2級」の資格、絶賛勉強中ですから。

男　名刺に？勉強中？

新人　なんでも聞いてください。大きいものから小さいものまで。レクリエーションの企画から実施まで行うプロとして何かお役にたてるかと。

男　頼りになるなぁ。じゃ今なにか。

新人　はい。はい？

男　今できるものは？

新人　…今ですか？ありますかね？

男　ないんですか？
新人　勉強中ですからね？…「今を祝おう会」ってどうですか？
男　あぁいい。
新人　え、良かったですか？勉強の甲斐がある。
男　どういう会ですかねそれは。
新人　今を祝うわけですからね…
男　えぇ、えぇ。
新人　このままの、皆さんを、祝いましょう。
男　いいですねー。
新人　甲斐がありますー。
男　母さん、今から家族で楽しくさ。（女に）ケーキでも買ってこようか。和菓子の方がいいかな。なんでこういうこと気づかなかったのかな。慣れてないもんで。
新人　プロがいますからもう大丈夫です。
男　あなたがいてくれて良かった。何でも指示してもらえれば。
新人　とりあえずそこら辺のもの片付けて…これは捨てないですよねお母さん。お部屋にもどしましょうね。
男　あ、私が（袋を受け取る）。
新人　じゃあ私は、こっちの（別の袋）捨ててきますね。紛らわしいから。…あ、お母さん、手洗ってませんよねまだ。洗いましょうか。
老女　…
新人　抱っこできます？
男　え？いやいやいやいや、それは流石に…
新人　ジローさんがいたらな…
男　…
新人　いや、ごめんなさい。抱っこしないとお母さん手、洗わないって言うから。…どこ行っちゃったんでしょうね。せっかく人気者だったのに…（言いながら、捨てる袋を外に出しに行く）
男　…

男、袋を二階の部屋に戻しに行く。
騒がしい雰囲気の中でも一人追い詰められていた女、

女　…ねぇ、さっきのあれってどういう意味？
老女　……
女　「しっ」ってしなかった？黙ってろってこと？お母さん全部覚えてるってこと？わざと…
老女　…

老女は、写真を胸に当てたまま、自分の世界に入っているように見える。

女　…そうよね。…そんなわけないわよね…

女、老女が身につけていた娘の物を奪い、髪を整えながら（撫でたりしながら）

女　…自分で自分がわからなくなるわ。
老女　……
女　…興奮…覚醒…熱狂…熱望…
老女　……
女　…あの人、私よりお母さんのことが大事みたい…
老女　……
女　…私たち、ここに来るべきじゃなかった…
老女　……

老女、女に強い力で撫でられたのか、「痛っ」という反応をみせる。

女　……

男、二階から下りてくる。

女　ごめんなさい、ぼーっとしちゃって…。何すればいいのかしら私。ケーキ？和菓子？どっちが…

男、近づく女を通り越して、そのまま老女へと近づく。

男　母さん、抱っこしようか。

老女　…

老女、立ち上がる。

女　……

◆第五場◆

老女は背中を向けたまま。
その日はいつもよりハトが多く集まっている。
玄関の呼び鈴は先ほどから鳴っている。
近所の苦情に対応していた女が戻る。

新人　…まったく。あんな言い方はない。だって〝ハトの数〟ですよ？ハトの数把握してるんだから。「昨日より１０羽も増えてますね」って報告必要ですか？

女　仕方ないわよ。ほんとにここ二、三日急に増えて…

新人　あの人、絶対四六時中見張ってますね…

新人、庭先にも集まっているハトを追い払う。

新人　コラッ…コレッ…オイコラ…

女　ごめんなさいね。フン掃除も手伝ってもらっちゃって。

新人　いやいやそれは、仕事のうちですから。

女　お母さん、もうエサ撒くのやめましょうね。

老女　……

玄関のチャイムが鳴る。

新人　…うわーもう来たー。何だ次は何だ。「十一羽に増えましたね」ですかね。

女　ほんと謝るしかなくて…（玄関の方へ向かう）

新人　「十一羽に増えましたね」って言われたら「そうですか？十二羽じゃないですか？ちゃんと数えました？」って逆に抗議したらどうですかね。責めたつもりが責められて向こうは唖然とするはずですからね一瞬。〝ハトが集まっている〟ということに抗議をしたつもりなのに相手には〝数が間違ってる〟という問題にすり替えられるわけですからね。誰しも自分の常識が通用しなかったことに戸惑いますよね。その一瞬を突いてガツンと玄関しめてやるとかどうですかね。向こうも次から頻繁にチャイム押す前にせめて

もう一度数を数えてから…

玄関から、松葉杖をしたジローが入ってくる。手には折り紙で造った小さな花束。

ジロー　ちーっす。
二人　……
ジロー　…あれ。なんかその服カッコイイね。どうしたの？
新人　…あぁ
ジロー　あ俺か。俺がどうしたのか。これね。骨折しちゃって。やっとここまで回復。
新人　…連絡が、
ジロー　いや、連絡できなくてね。携帯も壊れちゃって。で病院でこれの、これだから（ギプスで身動きとれなかった）。ほんとすみません。ご迷惑おかけして。
女　…いえ…
新人　…

ジロー、自然に老女の近くに寄り添うが、老女は相手にしないまま。

ジロー　褒められちゃった看護師さんに。回復が早いですねって。
女　その怪我、どうしたんですか？
ジロー　ちょっとね。高いところから飛び降りたんですよ。そしたらアレアレって（笑う）。
老女　……
ジロー　（笑う）。あ、新人さん。
新人　…え…
ジロー　お願いしますよ。ハトの。なんか凄いことになってますよ。
女　ええ。今も三人で手分けしてやってるとこで。

ジロー、部屋から庭を見る。

ジロー　うわー。なんかハト、結構いるしー。（老女に）こんなにハト呼んでどうするのー。なに企んでるのー。
老女　（微笑んだようだ）
ジロー　やっと笑ってくれた。（折り紙で造った花束を差し出す）はいどうぞ。記念日だから。
老女　…
ジロー　今日が記念日になるでしょ？再会の記念日。
老女　……
女　素敵ですね。
ジロー　入院中暇だから。動画見ながら造っちゃった。
新人　動画見ながら。
ジロー　検索したら出てく…あ。
新人　…

玄関のチャイムが響く。二度鳴ったところで、

新人　私が…
女　いいえ。私が。

女、玄関に。

新人　……

ジロー　二階から飛び降りたんだよね。で骨折しちゃった。
新人　それは、はい。
ジロー　びっくりした。ヤバい。人来るじゃんって。いつもだったらそのお宅さ、その時間自分しかいないから。利用者さんと、僕ね。でたまに二階のタンスからボーナスもらっていくの。勿論言ってくれたからね？利用者さんの方から。「ちょっと多めに持っていきなさいよジロちゃん」って。
新人　……
ジロー　なんかあの日、バレててさ。離れて暮らしてる姪っ子だかなんだかが部屋に隠れてて。タンス開けた瞬間に出てきたからホントビビった。
新人　…へぇ。
ジロー　表沙汰にはしないってことで、まぁ、穏便に。愛されてるからね利用者さんに。
新人　……
ジロー　え、バラしたの、新人さんだよね？
新人　……
ジロー　あれ。新人さんって、名前なんだったっけ。
新人　……。
ジロー　……
新人　…掃除、行ってきますね。

新人、掃除をする為（男を呼びに行く為）、出る。

ジロー　寂しかった？俺も寂しかった。
老女　……

ジロー、折り紙で造った花束の中から一本抜き出し、老女の髪にさす。

ジロー　俺ね。入院中ずっと考えてたんだよね。どうしたらいいんだろって。
老女　……
ジロー　で単純に気づいたんだ。あ、黙ってたらいいのかって。うん。俺が何か喋ったら困る人はいるけど、俺が黙ってたら、困る人はいなくなるんだよね。
老女　……
ジロー　だって俺、ほんと関係ないし。
老女　……
ジロー　（髪に挿す）はい。素敵。
老女　……
ジロー　でさ。こないださ。俺お金って、もらって帰ったっけ？
老女　……

ジロー、いつもの場所にお金を取りに行く。

ジロー　（探すが、ない）…え。ん？
老女　……
ジロー　え、え、え、…あれ？なんか、お金の場所って変えたの？…あれ？
老女　……

男、新人の知らせを受けて、急いで戻ってくる。
（新人と女も後から）

ジロー　…あ…
男　……
ジロー　どうも…あ、いや、これは…

男　…ちーっす。

ジロー　…ちーっす。ハハ……え、

男、ゆっくりジローに近づいていく。

ジロー　あれ、なんかこれって前にもあったような…

新人、さりげなく玄関への道を塞ぐ。

ジロー　…なんか誤解があるなぁ…いや、聞いてくださいよ。本人に。いつもこうやって持っていけばいいからって…ねぇ？

老女　……

ジロー　嘘だ…頼むからさ…

ジロー、男に捕まりそうになり、追い詰められ仕方なく裸足で庭の方から出て行く。

ものすごい数と勢いの、羽音。

全員　……

ジローは庭に出ると同時に花壇の近くで転んでいる。

ジロー　（声）痛っ…ちょっと勘弁してくださいよ…まだ治ってないのに…

ジロー、ふと、近くにある何かに気付き、悲鳴をあげる。

全員がそれぞれの思いで、凍り付く。

新人　…指…指が……

ジローと新人は、腰を抜かしたり、抜かしたまま後ずさりなどしている。

男は、夫の遺体の一部を見下ろしている。

部屋の中では老女と女の会話が。

女　お母さん、どうしよ…

老女　……

女　…見つかるよね。いつかは。

男　…あ。

男、遺体の近くに何かを発見する。

男　え？これってもしかして…

埋められた携帯電話を取り上げる。

男　あった！あったよ！…これってお前のでしょ？

女　…そうかも。どこにあった？

男　お父さんの近くに。

女　…そう。

男　え、なんでこんなとこに埋まってるんだ。

女　落ちたのね。

男　…へぇ。

男、夫の遺体よりも女の携帯を見つけたことに興奮している。
庭で土をはらったり。

女　…え。私、あの時落としたの？

老女　……

女　気づかないかな普通。…あの時はもう何が何だか…

老女　……

女　お願い…何とか言ってちょうだいよ…

ジロー　（庭で）あ、違うんで。

男　え？

ジロー　いやほんと、俺関係ないんで。

男　……

ジロー　（老女に）ねぇ。俺関係ないよね。本当のこと、言ってくれるよね？

男　なんだよ本当のことって。

ジロー　掘りましたよ。確かに。掘れって言われたから掘ったってだけで。

男　……

ジロー　…いやいやいやいや…

ジロー、かろうじてその場を逃げ、男もそれを追う（家の前あたりまで）。

女　私一人に押しつけるつもりじゃないよね？

老女　……

女　私ただ…お母さんが今から刑務所とか入るなんて可愛そうで…人ごとじゃなくて見てられなくて…

老女　……

女　覚えてるくせに。わかってるんでしょ？…え？あれってほんとに私が埋めてる時に落とした？後からお母さんが忍ばせたってことない？

老女　……

女　それよ。その表情よ。同情させて私のこと利用したんだ違う？！

老女　……

女　思い出しなさいよ、あなたが手を離したの紐を外したの。お父さんが苦しい時に一番苦しい時に。その時まで待って待って待って待ってお父さんが一番苦しむ時まで待ってから紐を放したんでしょ違うの？！本当のこと言いなさいよ！

女、つい老女に手荒くしている。
戻ってきていた男、それを止めに入る。

男　何してんだ母さんに！

女　そうでしょ…私ならそうする。

男、女に触れようとするが（もしくは既にふれているのを）振りほどき拒否する。

女　やめてちょうだい！

男　……

二階に駆け上がる女。それを追う男。

駆け上がる女と男の姿に、娘（と夫）の姿を重なる。
老女の〝本当のこと〟が一瞬、よぎる。

老女　…ちょっとあなた…

新人　…は…い…私ですか？

老女　見ました？

新人　…はい…

老女　あの子、やっぱり帰ってきたんでしょうか。

新人　…はい。

老女　…あぁ…

新人　…なにか？

老女　どうして帰ってきたのかしら。

新人　お母さんのこと大切だからでしょうね。

老女　こんなとこにいちゃいけない。

新人　そうなんですか？

老女　こんなとこにいちゃいけないって言ってきてくださいよ。

新人　…え、

老女　早く！

新人　あ、え…

新人、言われるがまま、二階へ。

老女は誰もいなくてもそのまま話し続ける。

老女　…わかるんですよ。あの子は夫のこと憎んでたんじゃないって。手を出されたりすることよりももっと…私のこと軽蔑してたんです。何も変えようとしなかった私のこと。なりふり構わず、なんで変えようとしなかったのか。引きこもるあの子を連れてなんで早く逃げなかったのか…

二階から、新人の声が聞こえる。（男が女に暴力をふるっているのを止めに入る）

新人（声）　何してるんですか！やめてください！

老女　帰ってきちゃダメなんです。あの子のこと、そっとしておいてやってくださいな。自分の人生、生き直してるんだから。親不孝？…なにが親不孝なもんですか。…ちゃんと、朝起きたらカーテンを開けてるかしら…そう？…たまには外に出て、ここ（頬）に風を当ててるかしら…そう？…そう？じゃあ十分ね。…そう？じゃあ…十分ね…

老女、胸がいっぱいに、張り裂けそうな状態に。

二階から男がおりてくる。

何かに寄りかからないと立っていられないような老女の姿に、

男　どうしたの？母さん。

そうしているうちに段々と老女、自分のこの気持ちが何だかわからなくなってくる。

男はその感情を別のものに差し替える。

老女　どうしちゃったのかしら。こんなに…苦しいのよ。

男　えぇ？

老女　胸がいっぱいで…幸せで…

男　……

老女　どうしてか…思い出せなくて…

男、安堵したかのように、

男　…父さんだよ。

老女　…

男　父さんが、ずっと一緒だってわかったから。

老女　…あの人のこと？

男　そう。

老女　幸せだったの？私。

男　そうだよ。（笑う）泣いてるじゃない母さん。父さんと離れられないんだよ。

老女　…そうなのね…

男　そこにいるよ、父さん。

老女　……

男　ほら。

男、老女を庭に誘導する。

老女、夫の一部が出ている場所に向かおうとする。

老女　……

行きかけるが、老女、立ち止まる。

老女　…幸せ？（首を振って拒否する）違うの…違うのよ。

男　父さんだよ。ほら。

老女　わからないのよ…

男　…

老女　私は、ただ…

何が違うのか自分でわからないが、夫のもとにはいけない老女。

老女、落ち着かなくなる。

「紐」を探しだす。

それは短く切られた多くの紐。結び始める。まず自分の手に。

切っては結び、そして離しては掴みを繰り返してきた、老夫婦の日々。

老女のその行為だけが浮かび上がる。

（そして他の人物たちは、その背景で動く。）

男は一人花壇の側に立つ。

（ジローが残した花束を供える）

階段から下りてくる女。

女は疲れ切っている。

女　…シャワー、借りた。

老女　…

女　変ね…まだ土が取れてない気がして…

老女　…

女　…お母さん。ねぇ知らない？私の携帯電話。

老女は、あくまで紐を結ぶことに集中している。

返事をする場合であっても相手の顔を見ない。会話は噛み合っているが、どことなく違う地点にいるようだ。

女　さっきからないのよ。

老女　どこにかけるの。
女　そういえば、お家の電話ってどこにしまった？捨てちゃったの？かけたらすぐわかるのに…
老女　あなたずっと立ってるのね。
女　……。
老女　さよならも何も言わないで出てきたから。心配してるのね。その人のところに帰りたい？
女　（首をふる）
老女　…
女　（考えるがまた首をふる）ただ…自分の輪郭が消えていく感じがして。こうやって離れると、何だか自分が透明人間にでもなった気分だわ。
老女　…
女　透明。存在意義のない人間。
老女　…
女　そんな人間にいつまでもしがみついてるあの人が可哀想で。
老女　……
女　あの人を否定することは、私を否定することと同じ。
老女　……
女　こういう私みたいな状態のことなんていうか知ってる？専門用語で「何とか何とか」っていうのよ。
老女　…
女　…そうやって分析して分類される側の人間。
老女　…良くないことなのね。
女　…さぁ。どうだろ。
老女　…
女　…なにしてるのお母さん。
老女　……結んで、ほどいて、結んで、解いて…切って、結んで、切って、結んで……
女　…手伝おうか？
老女　触らないでちょうだい。
女　ええ？
老女　これは私の仕事だから。
女　…
老女　私と、お父さんの。
女　……

老女、黙々と、日々の習慣をこなしていく。

女　ええ？怒ってるの？私は…
老女　…何も言ってない。
女　さっきから目も合わせないじゃないの。
老女　…
女　…お母さんのこと見てたら……私、自分の将来をみてるみたいで耐えられなくて、お父さんのこと手伝ってしまって…
老女　…私は耐えられない存在？
女　（首を横にふる）…ううん。逆よ。とても温かくて、哀れで、愛おしい存在よ。馬鹿にされることもない、誰にも負けないくらい立派で……
老女　（気にせず自分の作業を続ける）

女もまた、老女を気にせず、自分の独白に。

女　（首を横にふる）わかってる。自分の為ね。あの人を埋めるかわりに、お父さんを埋めたのよね。なのにどうしてこんな…（自嘲）あの人がいないと落ち着かないのよ。ねぇ知らない？私の携帯電話。

今頃気づいてくれてるかしら。（嬉しそうにしている）ＧＰＳぐらい見てるはずよね。そうよお母さん覚えてる？前に一度ここには来てるの。羽毛布団の時よ。あの人が持ってきて…二階の娘さんの部屋に運んだんだっけ？もしかして布団そのまま？やだなぁお母さんが使ってくれなきゃ。

老女と女は、既に別の地点にいる。
女、随分ラクになった状態でふりむくと、そこには男がいる。
男は女にヘルメットをかぶせる。

老女、細かく結びつないだ先端を、花壇まで運ぶ。

老女　さぁ、あなた、しっかり掴んでちょうだい。離したらダメじゃないの。さぁ。掴みなさい。

老女、そう言って、夫の指にかけようとする。

老女　離したらダメじゃないの…

老女、そのままうずくまる。

◆第六場◆

女、目の傷を隠すためにフルフェイスのヘルメットを被って、老女の代わりに椅子に座っている。
老女は花壇の側にいて、そして気づかうように男も側に居る。

新人　お母さん、少し部屋で休みましょうか。今から人が来ることになりますから…
老女　…
男　…

新人は、何やらノートに記録している。

新人　えーっと、どこまでいきましたっけ…
女　（何か喋る、が聞こえない）
新人　はい？
女　あの日、私が帰って来たときには…
新人　（書き写す）あの日、…
女　父はもうどこにもいなくて…おかしいなとは思ったんです。父がいたはずのベッドはもう冷たかったけど、まだ部屋には父の息づかいが残っているような気がしましたから。庭から母が戻ってきたんです。全身泥だらけで。私もすぐに気づけば良かったんですけど、その時は母の世話をすることに必死で。
新人　（ﾒ）
女　母は悪いことをしたわけじゃないんですから。気づいたら亡くなってただけなんです。どうしていいかわからなかっただろうし、父と離れるのもできなくて、自分のそばに埋めたんだと思います。…母がこんな状態なのに、死体遺棄で捕まるなんて耐えられなくて。イヤな予感はしたんですけど、どうしても聞けなくて。
新人　（ﾒ）えーっと…
女　早口でしたね。どこまで書けました？
新人　「私が帰った時には父はもういなくて」…ごめんなさい。

女　…ほんとに仲の良い二人でした。離れられなかっただけなんです。隠そうとしたわけじゃなくて。…二人でハトを待って過ごしてたこと、父が死んでからも同じ事してたんです。ハトが集まるようにエサを撒き続けて…書けてます？

新人　…いつまでそれ、被ってるんですか？

女　…（聞こえてないふりをする）

新人　…ま、いいですけど。

女　……

新人　…（ボヤキながら）書くのが遅いんじゃないんです。聞こえないんです…

女　…とりあえず、聞かれたらそう説明してください。私は…さすがにこんなアザじゃ。化粧して隠さないとね…

新人が記録をする筆記具の動きだけが聞こえる

女　あなたって…私のこと、嫌いでしょ？

新人　…（聞こえてないふりをする）…

女　私みたいな、…

新人　…（〃）

女　あれから目も合わせないものね。

女、立ち上がり、新人の肩か背中に触れる。

新人　…はい？

女　母の髪の毛、付いてたから。

女、付着していた髪の毛をとり、新人がそうしていたように、汚い物をとるようにして、落とす。

新人　……

女　…フフ。

新人　…さぁ。もう結構な時間ですよね。そろそろ警察に連絡しないと、

男　考えてたんだけどね。

新人　…（またか）

男　今も聞いたでしょ？気づいたら亡くなってたの。お母さんのこの状態じゃどうにも出来なかったわけだよね？でも離れるのがいやだった、自分の近くに埋めた。

新人　…

男　土葬だよね？結局。何か問題でも。

新人　さっきから話がグルグルぐるぐると…ちょっと待ってください。平気なんですか？そこに！…すぐそこに、遺体があるわけですよ？私もう…ちょっと気分が、

男　土葬なだけだよね。

新人　…

男　これって言わなきゃいけない？

新人　はい。警察がまず調べます。

男　いいですよ。やましいことなんてないんだから。どうぞどうぞ？好きなだけ調べたら、

新人　わかりました。

男　ちょっと待って！

新人　…

男　…え、何か問題でも？

新人　いい加減にしてください！百歩譲って千歩譲って、今ここだけが土葬ＯＫな国だとしましょう。

男　うんうん。
新人　誰が埋めたんです？それが問題なんですってさっきから何回も何回も何回も何回も、
男　だからさ。土掘ったのって、あのジローってやつなんだよねお母さん？掘ったっていうことはね、即ちそれ、そういうことでしょ？
新人　ですから、
男　やっぱりねー。何か他にも犯罪まがいのことしてると思ったよねー。
新人　…ですからそれを警察に調べてもらわなきゃいけないじゃないですか。
男　あいつだあいつ…
新人　それにですね。
男　はいはい。
新人　遺体を遺棄したという以前に…本当にその…お父さんが自然に亡くなったのかということも…
男　…
新人　…とにかく。そろそろ連絡しないと。
男　わかった。誰かわかった。
新人　…
男　…父さんじゃない？
新人　…はい？
男　あ分かった分かった。父さんだ。
新人　…
男　そうだそうだ…
新人　（あきらめてメモの続きを再開する）
男　父さん自身だ…自分から埋まっていったんだ…
新人　…
男　父さんが自分で紐外して、自分で埋まりに行ったんだ。
新人　そうですか。
男　助けたんだよ母さんのこと。
新人　…
男　最後の最後に。母さんが可哀想で見てられなくて。大切な人をラクにさせてやろうって。
新人　…
男　俺ならそうするかもしれない。
新人　…もうちょっと現実的な話を、
男　考えられるか？寝たきりで何年も何年も二人きりで。ハトが近くにいるだけで嬉しくて胸がいっぱいになるような寂しい生活で。母さんに何かしてやりたくても何もできなくて。自分さえいなければって毎日。
新人　…
男　毎日毎日。
新人　…
男　普通に墓に入ったからって、誰が参ってくれるわけじゃないんだし。ここにこうして居る方が、よっぽどいいじゃないか。
新人　…
男　二人にしかわからないことだってあるんだよ。な。
女　……
新人　…なんですかそれは。二人だからわからなくなってることってないんですか。
男　頼むよ。
新人　…
男　頼めないかな。
新人　…
男　見なかったことにしたら…
新人　…

男　俺たちが見なかったことにしたら…

新人　はい？

男　このままでいられるんだよね。

新人　…

庭から老女、部屋に入ってくる。

老女　誰かお客さんがくるって言ってたわね。

新人　そうなんですよ。

老女　誰。

新人　えっと…警察の人です。

老女　…警察？

新人　心配しなくて大丈夫ですからね。お話にくるだけですから。

老女　あぁそう。警察の人がお話ね。なんのお話しましょう。

新人　そうですね。お母さんの話、お父さんの話…お庭の話、…

老女　（笑う）なんでそんな話するの。私の話？お父さんの話？何も大したお話はないわよ。

新人　いいんですよそれで。

老女　まぁ（笑う）困ったわね。しませんよ、お話なんて。結構です。

新人　わかりました。大丈夫ですよ。私がお話しますから。お母さんは部屋で休んでください。娘さんに全部聞きましたんで。

老女　…娘？

新人　はい。

老女　あの子、まだいるの？

新人　はい。

老女　言ってくれなかったの？

新人　言いましたよ？こんなとこにいちゃいけないって。

老女　じゃどうして。

新人　どうしてでしょうね。

老女　聞いたって何を？あの子何を言ったのかしら。

男　この人がね、母さんが、もしかしたら悪いことしたかもしれないって言うんだ。

老女　悪いこと？

新人　そんな風には言ってません。

男　してないよねぇ？

老女　…（首をふる）

男　何にも悪くないよね。

老女　あの子がそう言ったの？

新人　さぁ、部屋に行きま、

新人、介護する為に腕をとるが、動揺している老女に振り払われる。

老女　…

ふと目に入った、ハトのエサの容器（袋か）を手にし、部屋の中（そこにいる人達）に大きく一度、弧を描くように撒く。（中身は入ってないかもしれない）

老女　食べなさい、ほら。

老女、一人一人と目を合わせるが、皆はそれぞれ、あきらめ（認知症に対する）に似た感情で目をそらす。※人物たちをハトだと言っている。

老女　来ましたよ。お父さん。ハトが来ましたよ。

男、老女の手にするものを取り、

男　もう、いいって言ってるよ。お父さん。

老女　えぇ？

男　もうハト呼ばなくていいってさ。

老女　……

男　…あ。そうだ。どっか行こう。

新人　…はい？

男　あ、そうしようそうしよう、ね。母さん。

老女　……

男　どこでもいいよね。息子と一緒なんだからさ。母さんが今まで行きたかった所、全部連れてってあげるよ。俺が母さんと行きたかった所、全部ついてきてよ。

老女　ええ？

新人　良くないですよ逃げるのは。

男　逃げる？なんでこれが逃げることになる。

新人　今いなくなったら、やっぱり逃げたってことになりますから。

男　母さんが何したっていうんだ。ただ必死で生きてるだけじゃないか。

新人　……

男　…放っといてくれよ。ずっと放っておいたんだから。こんなことになった途端ギャーギャー言うんじゃないよ。…現代社会の闇だとか何だとか絶対言いだすからな…（急に庭に出て、どこかの隣人に向かって）見て見ぬふりしてたじゃないか！年寄り二人困ってることは黙ってて、ハトのフンが自分の前に落とされただけで目の色変えて……母さん、すぐ出よう。ちょっと待ってて、荷物取ってくるから…

男、荷物を取りに部屋へ。

新人　……すみません。私、連絡してきますね、警察……

新人、電話をかけながら、その場を少し離れようと出る。

老女　…ヘルメットさん。

女　……

老女　あなた、お話してちょうだいね。

女　……

老女　なにか言ってちょうだい。

老女、すがりつくように、女の側に寄る。

女は、ヘルメットのせいで表情は見えず、（以前の老女と同じく）首をかしげるだけ。

老女　知ってるわよね。

女　…

老女　どうしたらいいのかしら。

女　…お母さん、私たち…

老女　ええ。

女　生きて…ね。

老女　……

女　生きてかなくちゃ、ね。

老女　……

女　お母さんが言ってくれた言葉よ。

老女　…そうね……そうだわ…

老女、以前と同じように、ヘルメット姿の女と、頭（額）をつきあわせ、そのままヘルメット姿の頭を撫でてやる。（※一場と同じように）

しばらくそれだけの時間。

新人、連絡を終えて戻ってくる。

新人　折り返し、連絡がくるということで…

次に動き出した時、老女の表情はまた微妙に変化している。

老女　…（毅然と）行きましょうか。

新人　え…

老女　（女に）先に行くわね。

女　……

新人　あ、あの、お母さん、行くってどこに…

老女　…逃げないわ。逃げるもんですか。

新人　…え？

老女　そう決めたのよ。

男　母さん。

男、二階の部屋（老女の本当の娘の部屋）から、昔、娘が身につけていただろう〝何か〟を、身につけて出てくる。

男　見てよほら。母さんの子供の。結構俺、似合うんじゃないかと思ってさ。どう？

老女　……

老女、男が身につけているものを冷たく奪い取り、そのまま部屋へ。

男　あ…ちょっと待ってて。車とりに行ってくるから。すぐだから。

男、やはり嬉しげに、玄関から出て行こうとするが、先ほどと違った、老女の様子が気になる。

男　…なんか母さんが…はは。ちょっと若返ったみたいだな。今、しっかりしてたよな？目が。

女　…

それぞれが何かしらの微妙な違和感を感じている。

男　気のせいか…

新人、男が外に出て行く時に、（わかりやすく）足を引っかけてつまずかせる。

男　…へ…

新人　あぁ…すみません。

男　…

再びの行動。

男　おいおいおい、ちょっと…

新人　（首をかしげる）

男　口で言えばいいじゃないか！

新人　ずっと言ってますけど私は！

男　……

新人　連絡、しました。

男　…あ、そう。

行こうとするが、また前に立ちはだかる。

男　まったく…

新人　…確かに私も思いました。見て見ぬふりはよくない。

男　…

新人　あなたのことです。

男　…何言ってるんだ…

男、車を取りに行く。その背中に向かって

新人　散々なことやってきて、いざとなったら「二人にしかわからないですよ」ってちょっっっっっと……ほんとは殴ってやりたいのに、どうしても理性が邪魔を…

新人、女に目をやる。

新人　…ストレートに殴ってやれば良かった。どうしてこんなところで足を引っかけるなんて姑息な手を…

女　……

新人　手、震えてますよ。

女　……

新人　ずっとです。気づいてました？

女　…ずっと？

新人　初めて会った時からずっとです。

女　…

新人、女の元に行き、サングラスを渡そうとする。

新人　こっちの方が。息苦しくないんじゃないかと。良かったら。

女　…（受け取らない）

新人　…私、なんとか。なるべく。正直に。もがくことはしなきゃって思ってます。

女　……

新人　テンション上げて接することでしか自分の頑張りアピールできないし、どんなに頑張っても利用者さんからは人気もないですし名前も覚えてもらえないし踏んだり蹴ったりの日々ですけど、勿論お金の為に働きますし、時には…いや頻繁に利用者さんのこと実はキッタネェなーって思ってますし、かなりの偽善者ですけど…

女　…

新人　なるべく正直に。私は。はい。

女　…

新人　震えてる人がいたら、握るだけの余力はあります。（サングラスを女の手に持たせる）

女　…

新人　生きるとは。なんぞや。

女　…

新人　（微笑む）

女　知っておいた方がいいですよ。
新人　（包容力をアピールするかのような頷き）
女　あなたは正しいことを言ってる。
新人　（〃）
女　自分を疑わない人の言葉は、弱ってる人を余計に追い詰めます。
新人　…失礼しました…

新人、シェードを下ろし、手を離そうとする。
しかし女は自分から新人の手を掴み直す。

女　でも…ありがと。
新人　（軽くうなづく）…。
女　ほら。嫌いって顔してる。
新人　…ええ。嫌いです。とっても。
女　…
新人　嫌い。
女　…

その瞬間に、電話の音が鳴る。

新人　…え…？！
女　……？！

新人、警察から折り返しかかってきたのだと自分の携帯をみるが、違う。
それは、この家には不要だった、家の電話の音。
不要物としてなのか、認知症の老女が隠したのかは不明だが、物の姿は一見、見当たらず（もしくは物に紛れて）、音だけが突然鳴る。
女と新人、とにかくその音源を探す。
女、ようやく見つける。
急いで受話器を耳に当てようとしてヘルメットに当たる。

女　…嘘っ（ヘルメットに当てたのが）

女、ようやくヘルメットを取る（背を向けていて顔は見えない）。
落ち着いて、サングラスをかける。

女　もしもし。…はい？もしもし？……はい何ですか？「ふ」？はい？「ふあゆ」って何です？…あー…フーアーユー？ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？私ですか？娘です。……はい？
新人　…はい？

女、驚いている（電話は切らない）。

新人　…あの…
女　ちょっとこれは…まさかまさかの大当たり…
新人　…
女　ｗｈｏ　ａｒｅ　Ｙｏｕって！
新人　…
女　ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ！
新人　…はい？私ですか？
女　…ほんとに海外に行ってたって…ほんとのこともあるもんだと思って…

新人　…え？
女　お母さん…
新人　…
女　お母さん呼んできて！
新人　え、あ、
女　早く！
新人　はい…

新人、急かされて老女の元へ。
男、呆然と戻ってくる。
女は少し興奮している。

女　あ、今、これ、
男　…
女　（小声で）フーアーユーって！
男　…
女　（〃）本物の。娘！
男　…え…
女　（〃）言ってみて。ＴＨＩＳ　ＩＳ　ＴＨＥ　ｐｅｎって言ってみて。

女、悪ふざけで受話器を男に向けて、「ほら、ほら」としながら地面に置く。

男　なんだよあれ…
女　え？
男　車取りに行ったら…フンだよ！ハトのフン！
女　…
男　車体が…フンだらけなんだよ！
女　…
男　あれじゃ車、動かせないよ。

女、可笑しさがこみ上げてくる。

女　最高なんだけど…お母さん…

笑いが止まらない。

女　（笑いながら）クソッタレ…
男　（合わせて笑う）おかしいか？
女　（〃。頷く）
男　おかしいよな。
女　（〃）
男　遠くから見たら…
女　（〃）
男　なんで俺の車だけ真っ白なんだと思ったよ。うわっ雪が積もってるって。
女　（〃）
男　フロントガラス一面にフンが。取ろうとしたけど、固まってるんだ。
女　（〃）
男　あれじゃ、お前と母さん、連れていけないじゃないか。
女　…うん。
男　……
女　うん。
男　……

女　ごめん。行かない。
男　…取ってくるわ。
男、再び車へと向かおうとするが、ふと、
男　父さんがハト、呼んだのかな。俺たちもハトも父さんに呼ばれたのかもな。
女　なにそれ。
男　違うか。ハトが父さんに会いに来たのか。
女　…どっちでも一緒じゃない。
男　父さんに会いにきてたなら、いいよな。
女　…
新人、戻ってくる。
新人　あの…お母さんが…
女　…
新人　お母さんが！
女　え、どうしたの…
新人　これ（先ほどの紐を見せて）で…
女　…え？
新人　こんなことしてる場合じゃなくて！これ使ってこんな風に！
女　え？
新人　…え、どうやって下りたんだろあれ…でも足引っかけられそうな出っ張りもあるからそれ使って…
女　え、なんです？
新人　とにかく二階から紐使って下におりて、な、なんか多分頑張って腕ふって…足あがってないけど、全然歩いてるスピードと変わらないけど、本人、多分、全速力って感じで…一瞬振り向いた顔が、なんか凄い形相で…
女　え？
新人　あれって…お母さん…
女　……
新人　逃げましたね…
男　…え…
新人　逃げましたね。お母さん…
女　…
茫然としている三人。
つながったまま外されている受話器。
花壇。
もがきながら飛び立った者の〝残骸〟を部屋のあちこちに残して。

【お終い】